

## かつて慈恵に在学した興味ある人物

### その四 慈恵病院女医第一号・ドクター岡見京子

はじめに断っておかねばならないが、この岡見京子（おかみけいこ）なる人物は、厳密な意味では慈恵に在学したことはない。彼女は明治 22 年（1889）、ペンシルベニア女子医科大学を卒業した洋行帰りの女医第一号（Doctor of Medicine, M.D.）である。しかし卒業してすぐ東京慈恵医院に就職したため、高木兼寛院長から学ぶことが多く、またその影響もきわめて大きかった。慈恵に学んだ人として、このシリーズに加えたわけである。

彼女は、高木院長によって同医院内に新設された婦人科の主任として抜擢、招へいされた。しかし、それから僅か三年ばかりでこの恵まれた地位を去っている。理由は、当時皇室との関係が深かったこの病院に皇后陛下の行啓があった時、彼女が女であるという理由で、宮内省から「拝謁」を遠慮せよと強いられたためであった。当時としてはこのようなことは常識であったが、アメリカ仕込みの（しかも強い自尊心をもった）彼女には、女性蔑視の屈辱と感じ、とうてい忍従することが出来なかった。彼女は、高木院長の婦人に対する理解と処遇にたいしては心から感謝しながら慈恵を去った。

#### 貧民伝導者をめざして

岡見京子は安政 6 年（1859）8 月、南部藩の商家、父西田耕平と母みよとの間に生まれた。戸籍名はけいである。兄一人、妹一人があった。

母みよは岩手県水野藩士の女であったため、京子は幼時から江戸水野藩邸で過ごすことが多かった。しかし慶応 3 年（1867）からは貿易商を営むべく一家をあげて上京し、京橋辺に居を構え、おもに英人を顧客として漸次盛業に向かった。

母は間もなく病死したため、幼い彼女は家事の担い手として家を切り盛りせねばならなかった。しかし母の精神的影響は大きく、京子が終生もちつづけたあの気高いほどの自尊心と威厳は、おそらくこの武家出身の母から受けた幼時からの教育の影響だったと思われる。

家業（貿易商）のせいもあって、彼女は英語の勉学の必要を痛感し、女学校に行くことを決心した。女学校といったも当時はまだほとんど存在せず、また進学希望者もごく僅かなものであった。（余談であるが）この頃から彼女は天与の美貌の持ち主に成長していった。

（参考のためここで当時の女子教育の状況を概観する）。明治5年（1872）8月の「学制」公布によって、文部省は近代学校の設置を強制したが、女子の高等教育にたいしては熱意が低く、明治5年に官立の東京女学校（別名、竹橋女学校、後述する本多銈子や鳩山春子はここで学んだ）を一つ、明治7年に東京女子師範学校（現・お茶の水女子大、後述する女医第一号・荻野吟子はここで学んだ）を一つ造ったのみであった。

しかし面白いことに、日本にきていたキリスト教宣教師たちは女子の教育にきわめて熱心で、多くの女学校を創っていった。キリスト教最初の宣教師・ヘボン（James, C. Hepburn, 1815-1911）夫妻は慶応3年（1867）横浜に女子の塾を開いたが、それが後（明治4年）のフェリス和英女学校に発展し、また婦人伝道師プライン（Mary, P. Pruyn）らが同4年につくったアメリカ・ミッション・ホームが後に横浜共立女学校に発展した。東京では、築地四二番館（後に新栄女学校となり、さらに東京女子学院となる。後述する矢島かじ子や景山英子はここで学んだ）、十三番館（後に海岸女学校、さらに青山女学院となる。後述する海老名みやはここで学んだ）が設立された。同じころ全国各地に同じよ



図1. 東京慈恵医院婦人科主任・  
ドクター 岡見京子  
(1859-1941)

うな女子の学校が一、二校ずつつくられたが、いずれも布教の意図をもった男女平等、一夫一婦制の教義によるミッション・スクールであった。

明治6年、岡見京子はいま述べたブラインの横浜共立女学校に入学した。そして彼女はこの学校の在学中に洗礼をうけた。このことは彼女の生涯に決定的な影響を与えた。明治11年、ここを卒業し、さらに東京女学校（別名、竹橋女学校）に入学した（しかしここはわずか2年の在学で廃校になった）。京子が二校でとくに勉強したのは英語であった。家業（貿易商）の影響もあったが、今後ミッションと協力しながら布教、伝道していくためには、英語の学力が是非必要であると思ったからであった。

宣教師ブラウン（Samuel, R. Brown）がアメリカ伝道局に提出した意見書のなかに次のような興味深い箇所がある。当時の宣教師が日本人をどのようにみていたのか参考になる。

「いやしくも、宣教師として派遣される者は、米本国の教会が推薦し得る最善の人物、即ちその信仰に於いても、学識に於いても、第一流の人物たるを要す。……殊に日本派遣の宣教師に必要なものは、度量の広大なもの、快活、温和であり、平等観念の強いことである。何となれば、日本人は礼節を重んじ、喜怒哀楽を表にあらわさず、仇敵に対して微笑をもって語るという国民であって、一方、他人の威嚇や圧迫には決して甘んじていない。これらの点に於いて、日本人は支那人と全然性質を異にしている。故に日本人に対しては、傲慢な態度をとってはならず、愛と忍耐と柔和をもって交わるべきである」と。

明治14年(1881)、京子は英語教師として私立・桜井女学校に奉職した。この女学校は明治9年に桜井ちか子によって創立されたもので、キリスト教婦人矯風会の矢島かじ子(1833-1925)が校長であった。いうまでもなく、ここもミッション系で、英語教育第一主義の学校であった。婦人矯風会というのは明治19年に矢島かじ子や海老名みやらによってつくられた婦人団体で、夫婦親子の間に封建的な差別をなくし、男女同権の健康な家庭をつくることを目的にしていた。小説「婦女の鑑」(木村えい子著)が世にでたのも明治20年

で、その頃の多くの女性が愛読した。キリスト教的な博愛主義から、貧民救済のために生涯をささげた女性をえがいたものであった。

明治10年代はまた自由民権運動の全盛時代であった。岸田俊子(1863-1901)や景山英子(1865-1927)らが男女同権、女性の自覚をよびかけ、婦人民権家として大いに活躍していた。とくに景山は女性の独立自由はまずその経済上の独立がなければならぬと主張して、いたるところで熱烈な女性の共鳴者をえていた。岡見京子がすごした青春時代はおおよそこのような思想的雰囲気であった。

桜井女学校在職中、京子は、同じく教師であった宣教師ミス・ツルー(Mary, T. Trou, 1841-1896)と知り合った。この知遇によって京子ははいよいよ信仰を深め、貧民伝道に邁進していった。またこの時期、ツルーを通じて、女医を志望していた本多銚子(1864-1922)とも知り合うことになった。本多銚子は10歳の時からツルーに英語をまなび、敬虔なクリスチャンとして成長していた。ツルーからは自分の娘のように可愛がられていた。本多は明治14年から女医になるべく、高木兼寛(1849-1920)が創立した成医会講習所の別科生に抜擢され、医学を勉強中であった(京子が本多と知り合ったのは東京女学校時代であった可能性も否定はできない。本多も同女学校が廃校になる(明治13年頃)までそこに在学していたからである)。

京子は、貧民伝道にせいを出すにつれ、また本多銚子と深く交際するにつれて、女医になる希望をもち始めた。貧民伝道には医療活動が必要であることが分かってきたからであろう。しかし、当時女性が医師になるにはまだまだ困難な時代であった。

まず女性には医学校に入る資格がなかったし、またもし何らかの手づるで(本多銚子のように)入学でき、医学を勉強したとしても、医師になるための医術開業試験を受ける資格がなかった。ただ東大医学部を卒業した人と欧米の医学校を卒業した人とは例外で、試験を受ける必要がなく、そのまま医師になることができた。しかし、その東大医学部にしても女子は入学させなかったから、女性で間違いなく医師になる道は外国の医学校に入学し、そこを卒業するしかなかった。京子は外国の医学校に入り、女医になることを夢みた。当

時（明治16年頃）、女子医学生であった荻野吟子（1851-1913）や生沢クノ（1864-1945）や本多銚子らが盛んに女性の（医術開業試験）受験許可の請願運動を展開していたが、何時解決するのか見当もつかなかった。

### ペンシルベニア女子医科大学に留学

明治17年（1884）8月、京子は頌栄女学校の絵画の教師・岡見千吉郎と結婚した。岡見家はもと中津奥平藩士であり、維新後は東京大崎に住み、品川、芝方面に広く土地をもつ名望家であった。頌栄女学校も岡見家の創立したものであった。千吉郎は5人兄弟の次男にあたり、安政5年（1858）2月の生まれであった。工部大学美術科（現・東京芸術大学）を卒業して（第一回卒業生）、直ぐ頌栄女学校につとめた。岡見一家はクリスチャンであり、千吉郎も京子とおなじく貧民伝道に関心をもち、また熱心な実践者であった。紹介する人によって知り合った二人は、急速に親しさを増し恋愛に発展した。しかし、京子の入信とそれに続く結婚は、京子の父にとってはあまり喜ばしいことではなかったらしい。結婚にさいして彼女に与えた教訓「夢にも生家を思うなかれ、夫と和睦し人倫五常を守り、帝国の法律に背かず、他の宗教に惑溺して苟も一身を滅ぼすことあるべからず」に、キリスト教に対する不快の気持ちがやや赤裸々にあらわれていた。

結婚して1か月、千吉郎は渡米してミシガン農科大学に留学することになった。京子はこの機会にぜひ自分も米国の医学校に入学し、夫と同じように勉強したいと考えた。彼女はそのための準備を短期間に精力的に進めた。千吉郎は、ひとまず（京子と同郷の）新渡戸稲造と一緒に立出していたが、その3か月後（明治17年12月）、今度は京子が、神学研究のために渡米するユニテリアンの神田牧師と一緒に夫のあとを追った。20数日の後（明治18年（1885）1月）彼女はアメリカに着き、直ぐにフィラデルフィアのペンシルベニア女子医科大学に入学した。千吉郎のミシガン農科大学とペンシルベニア女子医科大学とでは距離にして800キロも離れており、当然別居せねばならなかったが、これも二人の将来のためにはやむを得ないことであった。

ペンシルベニア女子医科大学（Women's Medical College of Penn-

sylvania) は1850年(嘉永3年)の創立で、世界で最初の女子医科大学であった。はじめ6人の男子教授と40人の女子学生、およびM.D.を得るための8人の女子学生から出発した。二年間の課程をおえて卒業したのは、40人のうちの8人だけであった。その8人のなかに、同校最初の婦人教授で生理学を担当し、のち学長になった Ann Preston (1812-1872) がいた。その後も卒業生は毎年12-3名程度であった。

京子が入学した頃は(学長は二代目の Rachel Bodley であったが)、いわばこの大学の新興期にあっていた。1875年(明治8年)にはフィラデルフィアの二十一番街と North College Avenue の角に立派な本建築が完成していたし、また創立いらい二年の課程であったものが、1881年には三年の課程に延長、充実していた。

学長の Rachel Bodley は、伝道医師を外国におくる仕事にも大変熱心であった。1870年には Clara Swin をインドに派遣し、また中国の北京、上海、広東、さらに朝鮮などにも卒業生を赴任させて、医療と伝道の新しい分野を開拓していた。それに応ずるように、今度は相手国から女子留学生がこの大学を訪れるようになった。京子が在学していた頃は、インドとシリアから、それぞれ Anandibai Joshee (1883年入学) と Sabat M. Islambooly (1885年入学) が来ていた。Anandibai は1886年に卒業したが、悲しいことに、このインド最初の女医は、母国の病院に迎えられる直前に結核で早世した。Is-



図2. 岡見京子が留学していたころのペンシルベニア女子医科大学の外国人留学生

左からインド人 Anandibai Joshee (1886年卒業)、岡見京子 (1889年卒業)、シリア人 Sabat M. Islambooly (1890年卒業)。

lambooly は 1890 年に卒業し、中近東最初の女医になった。

岡見京子は 1889 年（明治 22 年）に卒業した。卒業証書は羊皮紙の立派なもので、それには Doctor of Medicine (M.D.) の称号を与えると明記してあった。京子がこのペンシルベニア女子医科大学を選んだ理由については、学長 Rachel Bodley の医療伝道事業をすでに知っていたからであろうが、ではどうしてそれを知ったかとなると、よく分からない。おそらくそれは、桜井女学校いらい親交のあったミセス・ツルーを介して伝道医師ヘボンを知り、ヘボンからこの大学の存在を教えられたのではないだろうか（ツルーとヘボンは同じ長老派ミッションに所属する親しい間柄である）。

渡米女子留学生としては、すでに明治 4 年、政府から派遣された山川捨松（のち大山捨松）ら 5 人がいるが、個人として、医学を学ぶために独力で外国の大学に入り、M.D. の称号を得た女性となるとやはり京子が最初であろう。しかも当時は上述のように「日本官立大学ならびに欧米諸国の大学校に於いて医学卒業証書を得たる者は更に（医術開業）試験をすることを要せず（明治 12 年制定の医師試験規制）」という時代であったから、京子のように欧米の大学を出た者は、東大（当時の唯一の官立大学）を出た医学士と同等に評価されたのである。

### 東京慈恵医院の婦人科主任に

明治 22 年（1889）3 月、京子は夫・千吉郎と相携えて帰国し、同年 8 月、医籍に登録され、同時に医術開業免許が授けられた。そして翌 9 月にはもう、高木兼寛によって設立された東京慈恵医院の婦人科主任に抜擢、招へいされた。それまで同病院には婦人科という診療科目がなかったが、同年初めて新設されたのである。新帰朝のまだ 30 歳そこそこの京子にとってこれ以上の幸運はなかった。

京子がこの病院に就職するにあたって、高木は「貴女がこの職分につくことは婦人の開明上にも重要であり、またこの職分を遂行することはキリスト教伝道のもつ意義にも一致する」といって励まし

たといわれる。

高木が慈恵医院に京子を抜擢するについては、やはりその仲介に伝道医師ヘボンがいたように思われる。高木は、明治14年(1881)に洋方医の有志を会員とする成医会を結成し、同16年にはさらに成医会文庫の設立を決議したが、実はこの文庫設立委員7人の中にヘボンが選ばれており、さらに同17年には成医会の名誉会員にも推挙されている。つまり、高木とヘボンとの関係は、その頃までに相当親密になっていたのである(ヘボンと京子との関係については先に述べた)。

それにしても、女性蔑視の強い時代に、女性を一流病院の婦人科主任という高い地位に抜擢、起用した高木兼寛の進歩性は、もっと高く評価されるべきであろう。彼は、早く英国に学び、女医の活動をつぶさに見てきたので、わが国の女医の育成にも強い関心をもっていたのである。これについては、吉岡弥生(1871-1959、東京女子医大創設者)も「この慈恵病院の院長高木兼寛先生は、さきに成医会講習所で女医を養成されたこと(本多銚子らを明治14年に入学させたこと―筆者)からも分かるように、女医に対して大へん深い理解を持っておられる方でした。アメリカ仕込みの岡見さんを抜擢されたのも、女医の能力を公平に評価するための最初の実験にしたかったのではないのでしょうか」と述べている\*。

赤坂溜池の自宅から慈恵医院に通勤し、高木院長の指導を受けながら、婦人科の診療をしていた頃が、京子の生涯にとってもっとも幸福な時期であった。桜井女学校時代からの親友・本多銚子はすでに許可された医術開業試験に合格し(明治21年、女医第四号)、芝新堀町で開業していたが、慈恵医院でも毎週2回は京子の助手として診療を手伝っていた。またその頃は、本多の学友であり、病弱のため女医になることを断念した松浦里子も看護婦取締としてこの病院に勤務していた。(同じクリスチャンであったため、この三人で

---

\* この高木の進歩性は今後もっと高く評価すべきであろう。医学史上、女子学生を正規に入学させたとして有名な済生学舎でさえそれは明治17年(正式には18年)のことである。



信仰について語りあったこともあったであろう)。院長から聞く英国医学の話も、自分が学んできた米国医学との比較において興味深いものであったであろう(余談になるが、彼女の英語力は抜群で、美しい発音と流暢な話し方、達者な文章力は、いつまでもおとろえることがなかったといわれる)。とにかくこの時期は、京子にとって毎日が充実した日々であった。

吉岡弥生の書いたものの中に、その頃の京子の生活の一端を覗かせる文章が残っている。済生学舎の学生であった吉岡は、その頃「女医学生懇談会」なる会を結成し、さらにその会を強化するため、尊敬する女医先輩に会の顧問になって頂くべく要請して歩いたことがあった(先輩としては、荻野吟子(女医第一号)、高橋瑞子(女医三号)、本多銚子(女医四号)、岡見京子が選ばれた)。次の文章は岡見家を訪ねたときのものである。

「岡見さんのお家は、英語のリーダーの挿絵でしか見たことがないような立派な西洋館でした。毎日汚い学校と下宿の間を往復しているだけの私が、こんなハイカラな西洋館のなかにはいつて行くのかと思うと、胸がどきどきしてきました。……お留守だったので、待たせていただきました。三階の応接間の書棚には、分厚い洋書がぎっしり並んでいて、見たこともないような飾り物が、マントル・ピースの上に飾ってあり、羨ましいばかりでした。やがて靴音も軽く帰ってこられた岡見さんの姿を見て、そのすばらしい美しさに圧倒されてしまいました。もともと美しい方だとは聞いていましたが、今日のあたりにその憧れの人をみて“背中に後光が射しているような”まばゆいばかりの美しさでした。そのときの印象はため息のするような一生忘れがたい感動的なものでした。……私の願いには、即座に同意を与えられ、そのあと、珍しいアメリカの話や、向こうの女医の話などをゆっくり聞かせて下さり、本当に感激しながらお暇しました」と。

### 東京慈恵医院を辞し、衛生園を設立

このように充実した生活にあったにもかかわらず、岡見京子はこの恵まれた地位からとつぜん去った。明治25年(1892)6月、就任してから僅か2年9か月であった。理由は、冒頭にもふれたように、皇后陛下がこの病院を行啓

されたとき、彼女が女性であるという理由で、宮内省から「拝謁」を遠慮せよと強いられたためであった。

そもそも東京慈恵医院(施療病院)はその創立のときから、皇室との関係が深く、とくに明治20年からは、皇后がこの病院を総裁され、また皇室資金によって支援されることになったため一層親密になった。皇后はその年から毎年この病院に行啓になり、病室を巡視なさることになった。病院側では、その都度、院長、主任が皇后に拝謁して、医療の状況を説明申し上げる習わしになった。

京子が最初にその機会に遭遇したのは明治24年11月5日であった。彼女は、拝謁のおりには(同性のよしみもあり)、親しくご説明申し上げるべく、色々準備もしていた。ところが全く予期しないことに“貴女はたとえ病院の主任であっても(女性であるから)、皇后に拝謁することは遠慮ねがいたい”という強い要望があった。このような女性蔑視の思想はまだ当時の常識ではあったが、若い頃から革新的男女平等の思想になじみ、また現実にもそのような世界で生活してきた京子にとっては、まったくの不条理に映り、耐え難い屈辱を感じた。しかしこの要望の力が意外に強いことを知った彼女は、自らその職を辞することによってこの不条理に抗議することにした(切腹をもって抗議した昔の侍のような身の処し方であった。当時のこのような常識には



図3. 皇后陛下慈恵医院行啓図

皇后(昭憲皇太后)が患者を慰問し給う光景で、年少患者に玩具を授けるのは幹事長・有栖川熾仁親王妃董子殿下(明治20年)

どうしても従うことはできなかったのである)。ただ高木院長の婦人に対する理解と処遇にたいしては心からの感謝をもって辞任した。

新しい婦人科主任には慈恵医院医学校の教師・千秋雄雌郎（樋口繁次教授の前任者）が選ばれた。

京子は、その後しばらく自宅で医院を開業し、診療に従事しながら次の計画を練った。そして一年後（明治26年）、今度は豊多摩郡淀橋角筈（現在の新宿区角筈）に、旧知のミセス・ツルーと協力して、「衛生園」なる診療所を開設した。

衛生園は、2,480坪の広い土地に126坪の二階建洋風建築で、階上を病室、一階にサン・ルーム、ホール、食堂、診察室、薬局をおき、岡見家もそこで起居した。患者はゆったり一人一室としたため13名しか収容できなかった。

衛生園の医療目的は、京子自身が執筆した衛生園規則に簡潔に示されている。

本院ノ目的ハ左ノ二項トス

第一項 身体虚弱ナル婦女子ニシテヤヤモスルト発病ノ恐リアルモノヲ入院セシメコレヲ未然ニ防ガントス

第二項 病後快復期ニ至リタルモノヲシテ親切ナル看護ト養生トヲ専ラニシソノ恢復ヲ促進スルニアリ

この二項目は、現実には結核の予防と回復期療養に重点をおいたものであったが、その内容は現代医学の発病予防とリハビリテーションに相当するものであり、明治26年当時としては全く新しい先駆的発想であった。

また同規則の入院者心得には、

入院料ハ一日一等金二円、二等金一元五十銭、三等金一元

とあり、当時の下宿代が食事付きで三円（これは1カ月）であったことをおもうと、この入院料はきわめて高いものであった。

京子のこの試みは、画期的ではあったが、当時の一般的な医学常識からはあまりにも距離がありすぎ、また高額な入院料のため、殆ど利用する者がな



図4. 衛生園の外観

岡見京子が園長となり、ミセス・ツルーが協力してつくった療養所。  
場所は現在の新宿区角筈。

く、僅かに外国の婦人、宣教師らがたまに利用するに過ぎなかった。

吉岡弥生もこのように云っている。「発病初期あるいは回復期の病人などというものは、その頃はほとんど重要には考えられませんでした。なにしろ入院するということさえ、ある種の躊躇を感じていた当時の人々には、病前、病後の保養に金を使うなどということはほとんど頭にはありませんでしたから、まるで患者がよりつかず、岡見さんの新しい仕事も、こうして結局理想倒れに終わってしまいました」と。そして遂に、明治39年、衛生園は開設後13年にして閉鎖するの止むなきにいたった。

(ふたたび衛生園の医療目的のことであるが)この医療目的には、もちろんアメリカで学んだ医学の影響もあったであろうが、やはり高木兼寛から受けた教育的影響が大きかったように思われる。高木はもともと(脚気の研究で示したように)、健康と病気とは連続した現象であり、食生活をふくめて不適当な生活条件が続くと健康から病気にすべり落ち、条件を改善するとふたたび健康にはいあがるという風に考えていた。したがって高木の医療の特徴は、病気の除去に焦点を当てるのみならず、健康から病気に移行しないように、また病気治癒後はなるべく早く完全な健康体にもどるように注意するところにあった。京子は、まさにこの二つのことを明文化し、そのまま衛生園の医療目的にしたのであった。

京子はまた、衛生園内に看護婦学校を併設していた（この看護婦学校は実は衛生園の協力者、ミセス・ツルーによってつくられた桜井女学院付属看護婦養成所が明治31年にここに移されたものであった）。そして養成された看護婦は病院だけでなく、一般の家庭にも派出していた。ここにも高木の強い影響をみることができる。高木も、すでに明治18年に日本で最初の看護婦学校を創立し、そこで養成した看護婦は病院のみならず一般家庭にも派遣していたのである。

### 清冽な信仰生活の晩年

この衛生園の失敗の原因は、結局のところ現実に妥協できない京子の理想主義的性格にあったのであろうが、この失敗の頃から彼女は次第に世間から離れ、引きこもっていった。彼女の才能からみてまことに残念なことであった。

吉岡弥生も「要するに、岡見さんの躰（ツマヅキ）は、世の中から進み過ぎていたために起こった先覚者の悲劇であり、さらにつつこんでいえば、日本の実状を無視した理想主義的なやり方にありました、……あれほど社会的に華やかな存在であった岡見さんも、この衛生園に失敗してからは、女医の仕事もやめて、世間と没交渉になり、すっかり引きこもってしまわれたのは、惜しみてあまりあることでした」と述べている。

明治39年（1906）9月、女医の仕事をやめた京子は再び英語の教師として東京女子学院に勤めはじめた。この学校は、米国に留学する前にしばらく勤務したことのある桜井女学校と新栄女学校とが合併した、やはりミッション系の学校であった。

しかしこども、2年ほど勤務したとき、不幸にも乳癌に冒されたため辞任せざるをえなくなった。乳癌そのものは、みずから早期に発見し、手術をうけたため、術後の経過は良好であったが、しかしその精神的打撃は思いのほか大きかった。さらにこれに追い討ちをかけるように、長女・メレー（声楽家）が肉腫に冒され、手術をくり返した末、ついに23歳の若さでこの世を去った（大正3年）。最愛の一人娘を失なった京子の嘆き、悲しみは想像以上であっ

た。そしてもうこれ以上耐えることはできなかった。京子は以後一切の公職を辞し、目黒に住居をかまえて、家庭人として、またバイブル・クラスをもつ敬虔なクリスチャンとして静かに生きることに決した。

自分の誇りを失わず、病める人々のために医をもって奉仕しようと決したあの激しいエネルギーは、こんどは自己省察のために、神との対話のために向けられた。そしてクリスチャン仲間との交友は次第に深く密になっていった。中でも同郷の新渡戸稲造(1862-1933)がもっとも親しく、同氏によってYWCAとの関係もでき、内村鑑三(1861-1930)、河井道子(1877-1953、米プリンマー大卒、YWCA総幹事)らに接し、またガントレット恒子(1873-1953、G.E.ガントレットと結婚、英国籍、キリスト教矯風会会頭)、久布白落実(1882-1972、婦人解放運動家、キリスト教矯風会会頭)らとの交遊も展けた。なお鳩山春子(1861-1938、共立学園の設立者)や長谷川秀治(1898-1981、東大伝研所長、東大名誉教授)らも岡見家を訪ねる親しい客であった。

岡見夫婦の間には、メレーのほかに二男があり、次男・岡見清次は昭和18年以来ながく武田製薬の要職(常務取締役)にあった。

京子は、昭和11年に夫・千吉郎に先立たれ、その頃から再び厭うべき乳癌に冒された。この度は手術をしたが、もはや再び起つことはできなかった。昭和16年(1941)9月、彼女は82年と1か月の誇り高き人生を閉じた。信ずる神は、彼女に背き、不幸をもって報いたが、しかし彼女は最後まで、この酷薄なはずの神とともにあった。

本稿を終わるにあたって、秋山龍三氏の筆をかりて、彼女への餞の言葉にしたい。

「彼女ほどめぐまれた環境、清冽な業績、しかも女性として最も祝福さるべき天与の美貌に恵まれながら、彼女ほどに無名であった人を筆者は知らない。全人格をただ神の恩恵に託し、信仰について多くを語らず、まして個人的にも、社会的にも名声を意味するものを一切欲しなかった。家庭内においても、親と子の生活を画然と区別し、子息たちにさえ、彼女の全容を知ることはむずかしいほどであった」。